



ホストファミリーとの夕食会(2019年度)

Aktivitäten

## 第2章

交流のあゆみ



武藏国府太鼓の体験会(2012年6月)

# 青少年ホームステイ 相互派遣事業

ヘルナルス区と府中市は、青少年ホームステイ相互派遣事業を中心に交流を続けてきました。ホームステイを通じて、お互いの文化や考え方などの違いを知り、旅行では知りえない体験することができます。

## ホームステイ派遣事業

青少年ホームステイ相互派遣事業は、ヘルナルス区と府中の友好協定締結から2年後の1994(平成6)年7月に、府中から15歳から18歳の6名の若者を送り出し、ヘルナルス区ほどのウィーンのご家庭にホームステイをさせていただいたことに始まります。以来、コロナ禍による3年間を除き、一度も中断することなく、毎年実施され、府中からは26回、147名の若者がウィーンを、また、ウィーンからは9回、47名の若者が府中を訪れ、それぞれ異国での家庭生活を体験しています。

今や、派遣生は、その存在自体が両区市の友好交流の証でもあります。

両区市は、毎年、継続して派遣生を交換し合うことによってお互いが友好都市であることの思いを新たにし、きずなをより緊密なものにしてくることができたのではないでしょうか。

それぞれの首長をお訪ねした際、きちんと礼儀を尽くして訪問の趣旨を説明し、率直な意見、感想を述べる姿は立派な親善使節でした。また彼らは、ホストファミリーはもちろんその友人など、多くの人々とふれあうなかで、素朴な国際交流を展開し、公式使節による交流にも劣らぬ役割を果たしてくれました。

彼らは、短期間ではありますが、観光旅行ではなく、言葉も生活習慣も異なる環境に身を置き、母国とは異なる風物にふれ、異なった文化、異なったものの見方、考え方に対する接し、多くを体験し、存分に楽しみました。そのことによって、視野を広げ、言葉ばかりではないコミュニケーションのあり方と大切さも学べたことでしょう。



ヘルナルス区博物館見学(2017年度)

そして、彼らは、それぞれの国に新しい家族を作ることができました。

両区市それぞれの受け入れファミリーの温かいもてなしは、その方法こそ異なれ、まず、訪問当初の固くなりがちな彼らの心を溶かしてくれました。日々の生活を共にさせていただくことが当たり前のようになったころ、お別れのパーティー。時にはこのまま帰りたくないと泣き出す派遣生もありました。ホームステイが終わってから、更に長い交流を続けている例も少なくありません。

これまで、この事業を、それほど不都合もなく無事に進めてくることができたのは、両区市の行政当局をはじめ多くの関係者のご理解とご支援のおかげです。とりわけこの事業が、両区市のホストファミリーの一方ならぬご協力により成り立っていることを忘れてはなりません。中には何度も、繰り返し派遣生を受け入れてくださっているファミリーもおられます。皆様には心から感謝申しあげる次第です。

残念ながら、コロナ禍の影響で3年間の空白期間ができてしましました。

しかし、これからもより安心して派遣生を送り出せるよう周到な準備を整え、そして無理をすることなく、事業を担当する私たちもこの事業に携わることを楽しむ気持で、更に前進していきたいと考えています。

NPO法人府中国際友好交流会副理事長 吉永 茂興



茶道体験(2018年度)

## ヘルナルス・府中青少年派遣事業

### 府中市→ヘルナルス区へのホームステイ

1994年以来、6人の青少年たちが夏休み中にウィーン市ヘルナルス区を訪れ、当地のホストファミリーの元で10日間を過ごします。この事業の主なる目的は、ホストファミリーの方々と日常を体験することです。公の日程の中には区内見学があり、区役所表敬訪問、区博物館見学、フルツ講習会、そしてザッハトルテ作りの体験が盛り込まれています。

数日後には、皆が揃って徒歩でウィーン市内を見学し、別日には本物の「音楽の都・ウィーン」の印象を伝えるためのクラシックコンサート鑑賞があります。

そして最後に、ホストファミリーへの感謝の意を込めて、全員が集まってのお礼の夕食会が開かれます。



### ヘルナルス区→府中市へのホームステイ

この事業も、基本的にはヘルナルス区でのホームステイと同じような内容で企画され、2000年より実施されています。ウィーンから参加する青少年達は、それぞれの府中のホストファミリーの元で日本文化に触れる体験をします。府中市は、府中国際友好交流会と協力して日程を作成します。市内見学の日には、市長表敬訪問や、大國魂神社、郷土の森博物館の見学があり、また別の日には日帰りの「富士山散策」があります。そして、旅の締めくくりとして、ホストファミリーへのお礼として夕食会が開かれます。

ヘルナルス区現地連絡員 ドーリ・イリーニ



[市HP「ヘルナルス区元派遣生インタビュー動画」▶](#)



# コラム

## 派遣事業参加者の感想

### 《ヘルナルス区からの派遣生》

ローザ・フックス（2018年度派遣事業参加者、当時17歳）

### 日本一なんと言う体験！

注意深さ。日本、特に東京では、追い越し車線では、一人ひとりが多大なる注意を要します。仕事とストレスの中にはあっても、人々は注意深さを怠ることはありません。

誰もが親切で、思いやりがあり、いつもベストを尽くそうとします。最も良い例は「電車に乗る」ことです。ウィーンでは地下鉄車内で強い匂いを発する食べ物の食事は禁止となっていますが、日本では匂いの強い物を車内で食べようとするることは、誰も考えたりしません。

時には少ないことが多くを表現します。特に茶道に簡素な美しさを強く感じました。

茶道に使われる道具は多くないのですが、愛情を込め、手を抜くことなく作られています。このことは、素晴らしい日本料理にも反映されていると思います。オーストリアの料理に比べて、和食は素朴で量も多くなく、健康的で、味は純粹です。勿論「量より質」の考え方には、徐々にではありますが、世界中に浸透しつつあります。日本への旅は、

私に重要な事柄を改めて気づかせてくれる、大きな助けとなりました。

そして、私がウィーンに帰って、まずしたことは、タンスの中の整理でした！

友情に国籍はない。日本とオーストリアの間に大きな文化の違いがありますが、「思っていることを表現すること」、「分かり合うこと」などには、何の支障もありませんでした。誰もがこの交換事業のために尽力し、積極的行動した結果、生まれたものは忘れられません！

有難う！この場をお借りして、この事業のために熱心に、情熱的に尽力してくださった皆さんに対し、心から感謝の気持ちで一杯です！多くの新しい知人・友人が出来ました。そして、このことは私の人生を更に豊かにしてくれました。

家族も古い友達もいない、地球の反対側に居たのに、私はまるで自分の家に居るかのように感じました。心の一部を日本に残して来ましたので、いつかまた絶対に帰りたいです！

### 《府中市からの派遣生》

木下 みなみ（2017年度派遣事業参加者、当時17歳）

私は日本で生まれ、日本で育ちました。今回のウィーンでの貴重な経験を通して、ただそれだけの理由だけで、自分自身を日本国内で終わらせたくないと考えるようになりました。特に私は、日本とオーストリアでの教育制度の違い、難民や様々な宗教の子どもたちのことについて、強く興味を持ちました。また、私は今回、世界の広さを実感するとともに、「日本人」「オーストリア人」という区別は、それぞれの所属する国のみを表すものであり、それだけに固執し、先入観を持ってはいけないと強く実感しました。

今回のウィーンでの貴重な経験は、私自身の考え方を大きく変えました。自分の進路に悩んでいた私に、今まで考えもしなかった道を与えてくれました。

### 《府中市からの派遣生》

柏森 航太（2018年度派遣事業参加者、当時16歳）

今回のウィーンへのホームステイの経験は人生で一番の思い出になりました。日本とは全然違う時間の流れ方や使い方。音楽が好きな人以外はあまりウィーンに行くということがない気がします。一人でも多くの友達がウィーンに興味をもってくれたら嬉しいと思います。

ヨーロッパ人の思想の違いに今回を機にとても興味を持ちました。どこへ行っても自分らしく、周りと合わせたりしないで自分の道を進むことは難しいが、とても大切だと感じたのでそれを実践していきたいです。

# Eindrücke der Teilnehmenden am Jugendaustausch

## 《ヘルナルス区のホストファミリー》 ラム・ダニエル家(2017年度受入れ)

ホームステイを受け入れている際、私達は、自分達自身のことについてじっくりと考えたり、問い合わせてみたりしました。でも、チミン君の数々の暗黙の反応から、自分達が大切にしている多くの事柄を、私達が全く意識していないということに気づかされることとなりました。チミン君は、数日間ではありますが、私達に、自分達の世界を彼の視点から観る機会を与えてくれました。

そして彼の存在を通して、私達の日常は突然、沢山の驚きと、不思議な、そして特別な瞬間に変化したのです。



2016年度府中市派遣生

## 《ヘルナルス区のホストファミリー》 アウラー家(2018年度受入れ)

世界の若者達を引き合わせることは、とても大切なことです。そして、皆が同じような夢を抱き、考えを持っているのだと、世界の若者達が知ることは、平和貢献に関して重要なことであると、私達は信じています。

## 《府中市のホストファミリー》 岡本家(2019年度受入れ)

今回、我が家にとっては異文化交流として語学、歴史だけにとどまらず、同じ年頃の女の子の話題でも楽しむ事が出来ました。派遣生の受入れをきっかけにたくさんの方々と出逢い、交流出来たことは私にとっても貴重な経験となりました。感謝申しあげます。これからも友好交流事業が未永く続きますことを切に願っております。



2015年度府中市派遣生



2017年度府中市派遣生



2019年度府中市派遣生

## 施設間友好協定①： 小学校間での交流

2007(平成19)年10月に、ハリルシュガッセ小学校と本宿小学校の間で友好親善校協定を締結してから、相互に手紙や作品の交換などによる交流を行っています。

### ハリルシュガッセ小学校と本宿小学校との学校間交流

ウィーン市ヘルナルス区との交流30周年を迎えるにあたり、そのお祝いとハリルシュガッセ小学校との学校間交流についてのお礼を申しあげます。

私は2021(令和3)年度、本宿小学校に着任しました。着任前の引継ぎで、前任校長から府中市がウィーン市ヘルナルス区と友好都市の関係であることや現地の小学校と学校間交流を行っていることを聞いておりました。私の前任校のある世田谷区もウィーン市(ドゥブリング区)と姉妹都市として交流をしており、担任時代に教え子をウィーンへのホームステイに送り出しました。府中市の勤務で交流の機会をまたいただけることをたいへん嬉しく思うとともにオーストリアやウィーンにご縁を感じております。私もぜひ音楽の都ウィーンを訪れてみたいと思います。

さて、本宿小学校とハリルシュガッセ小学校との交流は、2001(平成13)年4月より始まり、毎年手紙での交流や児童作品の交流を行ってきました。2007(平成19)年にはハリルシュガッセ小学校訪問団一行を本校に迎え、本校と友好親善校の協定を締結し、調印式を行いました。また、2013(平成25)年、2017(平成29)年には、本校にヘルナルス区訪問団を迎えてました。コロナ禍が続いている現在は、残念ながら手紙や作品の交流のみとなっておりますが、2021(令和3)年度も夏休み前にハリルシュガッセ小学校の皆さんからたくさんの手紙やメッ

セージカードなどの作品を送っていただきました。児童が利用する昇降口の横に交流コーナーを設け、いただいた手紙や作品を展示しており、たくさんの子どもたちが楽しそうに見ています。本校では、国際交流委員会が学校間交流の窓口となっており、いただいたメッセージなどの管理やこちらから送るメッセージの作成などを担い、子どもたちは張り切って取り組んでおります。

日本では2021(令和3)年の夏に、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会が開催されました。そして、学校でもグローバルな視点をもち、外国の方や障害をもつ方など様々な人たちと交流することの大切さを学んできております。授業の中で、外国の文化を理解することやコミュニケーション能力を身に付けることに力を入れ、子どもたちは体験を通して学んでおります。ハリルシュガッセ小学校のあるオーストリアのことでも本校の多くの子どもが興味や関心をもっております。ハリルシュガッセ小学校との交流の機会をいただいている本校は、たいへん恵まれていると思います。

私は本宿小学校の校長として、本校とハリルシュガッセ小学校との交流が今後も末永く続くことを願っております。これからもよろしくお願ひいたします。

府中市立本宿小学校校長 藤咲 孝臣



## 本宿小学校とハリルシュガッセ小学校との学校間交流

私が2002年にハリルシュガッセ小学校校長に就任した当時は、府中とヘルナルス間の様々な機関においてすでに友好関係が成立していました。学校レベルでの最初の接触も始まっており、私が2005年に日本・府中を初めて訪問した機会に更に深まりました。そしてこのプロジェクトは2007年、ハリルシュガッセ小学校の教師を中心とした市民グループが府中を訪れた際に最終的に確立しました。本宿小学校での盛大な式典の中で両校の友好協定が調印され、これを以て学校提携が確固たるものとなったのです。教師同士のグループディスカッションでは、互いの教育システムの違いについて理解することができました。それ以来、日本からの来賓の公式訪問や私の府中訪問、また生徒間での活発な交流が続いています。本宿小学校への訪問では、毎回特別な体験をさせていただいておりますが、これもホスト側の多大なご尽力のおかげであります。同様に、府中からも野口前市長、高野市長、府中童謡の会などの代表団が本校を訪れてくださいました。

ハリルシュガッセ小学校はヘルナルスにある全日制の小学校です。現在、6歳から10歳の370名の子どもたちが通っています。もともとドイツ語以外の母語で育ち、この学校に入学してから初めてドイツ語を学ぶ、という子どもたちも多いのです。そのため、授業は個々に合わせて組み立てられており、言語、創造性、スポーツの分野から多くの補足的な活動を提供しています。また、統合教育クラスと呼ばれる一部のクラスでは、障害児と健常児と一緒に指導しています。

小学生の子どもたち同士の個別の交流は難しいため、主にヘルナルスや府中の学校での授業風景や、音楽・スポーツの行事を撮影した短い動画や写真を通じて、互いにコンタクトを取り合っています。日本の小学生の皆さんからの定期的なお



便りはいつも楽しみにしていますが、とりわけ手芸品はこれまでの中で一番人気でした。色とりどりの千羽鶴が入った小包が学校に届いたのですから。折り鶴は、皆に幸福と平和をもたらしてくれるそうです！

日本から郵便物が届いたり、また日本のお友達への手芸品を作ったりすることは、子どもたちにとっていつも大きな喜びとなっています。先生たちの助けを借りながら、子どもたちは見知らぬ異文化への洞察を得たり、外国あるいは他の大陸に住む人々への理解を深めたりすることができます。そういうやつて、平和で喜びに満ちた共存というものの基礎を子どもの時から築くことができるのです。

私は、両校が友好関係の継続と更なる深化を共に目指していることを確信しておりますし、将来にもわたって引き継がれて行くことを信じて疑いません。

ハリルシュガッセ小学校元校長／  
ヘルナルス・府中友好協会副会長  
ブリギッテ・ツェヒリンガー



府中市訪問団によるハリルシュガッセ小学校訪問（2019年5月）

## 施設間友好協定②： 中学校間での交流

1996(平成8)年5月に、ゲプラーガッセ・ギムナジウム(中高等学校、小学校5年生から大学1年生に相当する年)と府中第九中学校の間で施設間友好協定を締結して以来、これまで数多くの交流を行っています。

### ヘルナルス区ゲプラーガッセ・ギムナジウムと府中第九中学校交流の歩み

私は、2018(平成30)年から本校に勤務し、ウィーン市ヘルナルス区と府中市の友好都市交流の一環としてのゲプラーガッセ・ギムナジウムと府中第九中学校との関わりを知りました。歴史をたどると、1992(平成4)年に協定が結ばれ、ヘルナルス区と府中市の交流が行われてきました。今までにヘルナルス区から学生が9回日本を訪れ、ホームステイし府中市との交流を親密にしてきました。

私が本校に着任した時に、ゲプラーガッセ・ギムナジウムとの交流を具体的に進めてきました。互いの学校の様子をDVDに録画し紹介したり、模造紙に生徒のプロフィールを書いた紹介文を交換したりと着々と計画を立て、2020(令和2)年にはゲプラーガッセ・ギムナジウムから来る訪問団を歓迎するためのレセプションも考えていました。しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により実施することができなくなりました。学校としても、楽しみにしていた生徒にしても大変残念な思いでいっぱいです。直接交流が中止にはなりましたが、いつかまた会える日を楽しみに交流活動を続けていけばと思っています。30年にわたり交流を継続できたのは、年を重ねながら親密な関係を築き上げ信頼関係ができたからだと思います。2020(令和2)年度から続く、新型コロナウイルスの感染拡大により中止を余儀なくされても、互いの関係には困難を乗り越え、関係を維持できる信頼関係が根付いていくと思います。



ゲプラーガッセ・ギムナジウム生徒が九中を訪問(1998年5月)

学校教育は長い月日をかけて、生徒の人格を形成し、良き社会人になるための資質を作り上げます。本校の教育でも、小学校から中学校に入学したての生徒が中学校を卒後するころには、逞しく成長し社会人になるための素養を身に付け卒業していきます。これは、ゲプラーガッセ・ギムナジウムでも同様だと思います。

また生徒の成長に関わる教職員も保護者と同じ気持ちで生徒に接し、生徒の成長を心から願っています。オーストリアと日本の交流事業は、互いの学校の生徒たちの成長をより豊かにする取り組みの一つだと思います。直接体験をできた生徒にとっては、異文化を知ることで見聞が広がり、様々な視点から社会を見つめることができるようになってくると思います。

交流を通して、自国に誇りを持ち、他国の文化の良さを知り、両国の懸け橋になれる人材を育成することが教師の役割であると考えています。活動を通じ、心豊かで、国際的視野を持ち、世界の中で活躍できる人物になることを願っています。

最後に、私は、両校が友好関係の継続と更なる深化を共に目指していることを確信しておりますし、将来にもわたって引き継がれて行くことを信じて疑いません。

府中市立府中第九中学校校長 吉田 修



フォークダンスの披露(1998年5月)

## 友好で結ばれる平和 ゲブラーガッセ・ギムナジウムの生徒たちが府中にやってきた経緯は？

友好協定が締結されて数年後、府中市とヘルナルス区の高校生たちが、夏休み中にそれぞれの相手側の家庭に滞在する青少年ホームステイ相互派遣事業の枠内で、青少年間の活発な交流が始まりました。1996年には、府中市立府中第九中学校と17区ゲブラーガッセ・ギムナジウムとの間で友好協定が結ばれました。この協力関係は、ヘルナルス区のギムナジウムにおいては、アストリッド・ピヒラー先生のご尽力のもと、20年以上にわたって継続されました。ピヒラー先生が長年にわたって日本人の高校生たちを自身の家庭に受け入れてくださったことから、温かい友好関係が継続的に育まれ、その後も元派遣生やその家族たちが個人的に訪問し合うなど、更なる交流が深まって行つたのです。学校が改装中だったときは、ピヒラー先生の発案で、日本のお土産を集めた展示会が開催されました。当時の校長であったマウアーホーファー先生（故人）は、そのアイディアを即取り上げ、日本に関する大規模なプロジェクトを提案しました。あるクラスでは、1週間のすべての授業を日本をテーマにしました。（例えば、日本料理、ウィーンにある日本人学校への訪問、着物の着付けなど）実施に当たっては、通訳のイリーニ氏から貴重なサポートを受けました。その結果、講堂を埋め尽くすほどの展覧会となり、その後、エルタライン広場の銀行支店でも展示されました。

府中市側では府中第九中学校の協力もあって、このクラスを招く準備を整えてくださいました。これを受け、ギムナジウム側ではウィーンについて十分な紹介ができるよう、この訪問旅行のための入念な準備が始まりました。フルツ、フォーグダンス、ポロネーズの練習、それに相応しいディアンドル、民族衣装、イブニングドレスの調達。ピアノに歌の練習。男子は府中でのバスケットボールとバレーボールの校内大会に向けてトレーニングを開始。府中第九中学校は、ウィーンからのゲストのために特別なプログラムを用意してくださいました。マウアーホーファー校長が同行したこの旅行は、若者たちにとってまたとない経験となりました。

わたくしが校長の後任に就いた後も、府中市との密接な関係を維持することができました。わたくし自身も友好協定締結10周年であった2002年に友好訪問団に参加し、その旅行の目玉であった富士登山も果たすことができました。

その後再びプロジェクトが計画され、学校友好協定に基づいて府中からクラス5Aに改めてご招待がありました。この旅行は、区長のイルセ・フェッサー氏の日本訪問と同時に行われました。どの訪問の時もそうであったように、市長や府中第九中学校の生徒たちがわたくしたちを温かく迎えてくださいました。盛大な歓迎会、催し物、遠足、学校訪問、ディスカッションなどを通して、当校の生徒たちは府中市の様々な側面を知ることができました。

府中の代表団は何年にもわたって当ギムナジウムを訪れてくださいました。学校制度の違いについては、当校の教師間でも興味深い議論が繰り広げられたものです。

その後も、府中第九中学校とのプロジェクトは引き続き実施され、日本の生徒たちともビデオ、Eメール、ポスターなどのやり取りをしながら、府中とウィーンでの自分たちの周りの環境や生活について互いに説明し合ったりしました。このような活動は今後も可能な限り続けられるべきでしょう。

本来であれば、今頃この活発な交流の中心は、長い時間をかけて準備する日本旅行となっていたはずです。6年生が学年末に府中を訪れ、中でもその期間に提携校の授業に参加するという計画が立てられていましたが、残念ながらパンデミックのためこの渡航は中止となってしまったのです。生徒たちの落胆は大きなものでした。しかし、当校としては近い将来、これを是非実現したい考えです。

ゲブラーガッセ・ギムナジウムの現校長としてわたくしは、本校の日本関係コーディネーターたちであるアストリッド・ピヒラー、ヘルベルト・オーバーマイヤー、クリスティーネ・クラネビッター、クレメンス・ビンダー、ソンニヤ・マイヤー、マルリース・シュナイダーの各先生方に、交流プロジェクトの遂行と長年にわたる寄与を感謝いたします。

また、通訳のドーリ・イリーニ氏に、特別な感謝を表したいと思います。彼女はその豊富な専門知識と日本の文化への深い造詣をもって、わたくしたちを長期にわたり、積極的にサポートしてくださいました。非常な感性と優れた語学力で、多くの困難な状況を見事に解決に導き、そもそもこの学校同士の交流が可能となったのも彼女のおかげなのです。

ゲブラーガッセ・ギムナジウム校長 エファ・メルジツ

## 施設間友好協定③： 教育施設での交流

1996(平成8)年5月に、ヘルナルス区成人学校と生涯学習センターの間で施設間友好協定を締結し、それ以降、講演会や写真展等を行っています。

### 文化を伝える—市内施設における交流

生涯学習センターは、ヘルナルス区成人学校と協定を締結して以降、様々な交流を行ってきました。

#### 1997(平成9)年10月

生涯学習フェスティバルでトーマス・ライマー成人学校講師が講演

#### 1998(平成10)年2月

成人学校で府中市写真展を開催

#### 2006(平成18)年7月

生涯学習センターでナターシャ・ルシチカ成人学校責任者代理を講師に国際理解・平和講演会を開催

#### 2014(平成26)年10月

生涯学習センターでヘルナルス区訪問団の方を講師にウィンナーワルツ体験会を開催

また、協定は締結していませんが、郷土の森博物館は友好交流の様々な場面で関わっています。府中市からのホームステイ派遣生は、派遣に向けた事前研修を行いますが、その一環として博物館を見学し、府中の歴史や暮らしについてヘルナルス区のホストファミリーなどに伝えられるように学んでいます。

ヘルナルス区からの派遣生や友好訪問団も、来訪時には博物館を見学しています。昔の府中を再現した常設展のジオラマや、旧小学校をはじめとした園内に移設された建築物などは、特にヘルナルス区の皆様の関心を引いているようです。見学の他に、園内での野点や餅つきなど、日本文化に触れる体験を行ったこともあります。

このように、府中市では様々な施設がヘルナルス区からの派遣生や訪問団を歓迎し、また両区市民の相互理解を深める取り組みに携わっています。

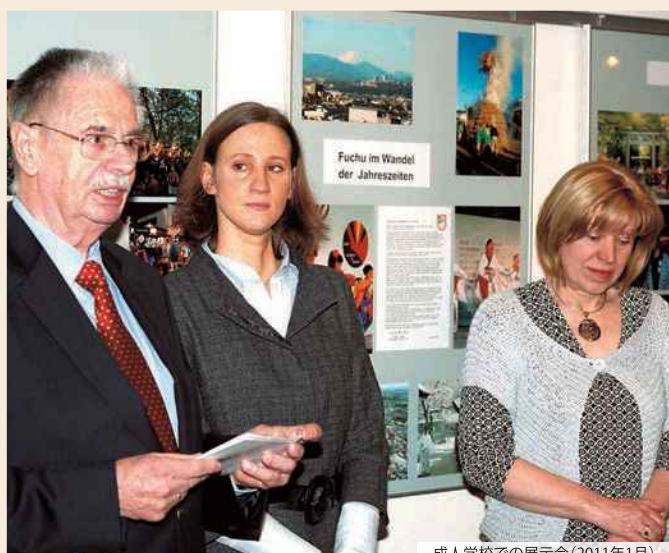
府中市都市交流担当



ルシチカ成人学校責任者代理による講演会(2006年7月)



ウィンナーワルツ体験会(2014年10月)



成人学校での展示会(2011年1月)

## ヘルナルス区成人学校—府中市との長年の友好関係を振り返って

1996年以来、府中市の生涯学習センターとヘルナルス区成人学校は友好協定関係にあります。

友好の中心には、常に人々と物語がありました。と言うのも、文化と言語が相互理解を深める上で一番の道具であるからです。友好関係の分野は、府中市訪問、両市区における語学ワークショップ、料理教室に始まり、吟味された様々なイベントにまで広がっています。

1997年、当時ドイツ語を第二言語とする講座の講師であったトマス・ライマー氏(現ヘルナルス区成人学校校長)が、市民教育機関の代表として府中の生涯学習センターを訪れました。3週間にわたる講座の目的は、講義や短期講座を通じて、文化、言語に興味のある参加者に、ウィーンの市民教養とドイツ語を知ってもらうことでした。そして、ヘルナルスの成人学校では、府中市で得た多くの印象や体験を区民に紹介すべく、コメント付きの写真展を開催し、それと平行して、友好関係を結んでいるゲブラーガッセ・ギムナジウムのあるクラスでは日本に関するワークショップも行われました。

ヘルナルス区成人学校の前講師で、責任者代理であったナターシャ・ルシチカ氏は、オーストリア、特に友好関係にあるヘルナルス区を紹介するため、府中市に招待されました。

彼女は当時の印象を次のように綴っています。「2006年の夏、私は4週間を府中市で過ごし、日本文化と日本語に接する機会を得ました。ホストファミリーからの温かい歓迎を受け、日本という魅惑的な国の日常生活を垣間見ました。私の府中市滞在は、到着から出発まで完璧に計画されておりました。滞在の目的は、オーストリア及びウィーンの歴史についての講義で、多くの方々が参加してくださいました。ボランティアの皆さんによって行われている生涯学習センターでの語学講座は、私の日本語への手ほどきとなりました。

学校訪問、日帰り旅行、催し物への参加、知人宅への招待などで、私の滞在日数はあつという間に過ぎていきました。友情、真心、そして助力を惜しまない気持ちがとても大切にされていることを感じ、長年にわたる府中市とヘルナルス区の繋がりにも、これらが生かされています。この滞在は、素晴らしい、そして私を豊かにしてくれた体験で、今もなお、私の心に残っています」。

長年の間、フランチェスカ・フェラリス氏と、彼女の後継者であるアンドレア・ワーグナー=シュタリツ氏、そしてシリヴィア・グイドリン氏が催し物や展覧会を企画してきました。府中市とヘルナルス区の交流、そして日本文化への認識が、これらの企画を通して可能になったのです。

成人学校では常に語学講座に重点を置いています。それは、知識を得ることに興味を持つ参加者に、日本語と日本文化を紹介することにより、日本という国と、その習慣に興味を抱いてもらうことが大切であると認識したからです。そして、日本語講座が友好関係の一環として、両市区の関係の発展に役立つとも考えたのです。このような理由から、ヘルナルス区成人学校では、区役所の支援を受けた日本語講座を、定期的に企画・提供しました。

友好協定締結25周年記念の年には、府中市からの市議会議員友好訪問団と副市長・吉野誠氏がヘルナルス区を訪問されました。成人学校はこの日本からのお客様を、校内に設けられている調理室に招待しました。

料理人であり、講座の講師であるマルティン・タウベルトーヴィツ氏が地元の旬な食材を使って、その腕を奮いました。

数々の訪問や共に行ってきた企画・催し物が残したもの、それは、友好関係は出会いを通じて発展し、絶え間ない、さらなる事業の継続によって、ますます強固なものになるという認識です。

私達は、私達を豊かにしてくれた多くの出会いに思いを馳せ、将来も、府中市とヘルナルス区の友好関係に貢献できることを嬉しく思っています。

ヘルナルス区成人学校責任者  
シリヴィア・グイドリン  
ナターシャ・ルシチカ  
トマス・ライマー

## 施設間友好協定④: 図書館での交流

1996(平成8)年5月に、ヘルナルス区図書館と府中市立図書館の間で施設間友好協定を締結しました。これまで相互で送り合った資料や書簡等は、それぞれの図書館で閲覧することができます。

### ヘルナルス区図書館との交流

1992(平成4)年のウィーン市ヘルナルス区と府中市との友好協定の締結を受け、図書館においても、1996(平成8)年5月2日に友好協定を結びました。

翌年4月には、大國魂神社の境内にあった旧中央図書館の書架に「ウィーンコーナー」を設置しました。当初はウィーンに関する100冊程の資料のほか、貴区より寄贈いただいた図書やCDを配架し、手作りの看板を設置した小さなコーナーでしたが、毎年、資料や書簡を取り交わし交流を続けることで、今では図書館が誇るコレクションへと成長しました。

2007(平成19)年12月に、旧中央図書館の建物老朽化に伴い、場所を移転し、市民会館との複合施設である「ルミエール府中」内に、ユニバーサルデザインを取り入れた新中央図書館を開館しました。3・4階にカウンターや開架書庫、5階に学習室、地下1階に自動出納書庫を備えた図書館として、現在では蔵書数は約100万冊となりました。

また、ウィーンコーナーは白と黒の大理石の床に優雅なテーブルとソファを配置し、壁面にはウィーンの街並みをデザインした一室として生まれ変わりました。ガラス棚には、ヘルナルス区図書館との協定に関する資料や1994(平成6)年6月に府中市の使節団がヘルナルス区を訪問した際に寄贈いただいた「ホイリゲで演奏されるシュランメル音楽を楽しむ聴衆」の一部の像を展示しています。

更に、その隣の棚には、ヘルナルス区からいただいた資料やウィーン関連資料が約300冊、CDが約170点、その他往復書簡などを展示しています。ヘルナルス区図書館からいただいたCDは、選び抜かれたバロック最盛期から現代までのオーストリア音楽コレクションです。このCDは室内に設置しているCDプレーヤーでどなたでも視聴でき、「音楽の都」であるウィーン本場の雰囲気を味わうことができます。ウィーンコーナーは、図書館にいながらウィーンの芸術・歴史・文化・自然などを感じられる場となっています。

贈っていただいた書簡は、ウィーンの情景が身近に感じられる温かい文章で、ヘルナルス区図書館の様子も書かれており、お互いの文化を深く知るための貴重なものとなっています。

近年では、図書館においてウィーンに関する講演会を開催し、多民族社会における人々の暮らしを学びました。世界中でおきたパンデミックを乗り越え、これからも心のこもった文化交流が栄えていくことを願っています。

府中市立図書館



ウィーンコーナー入り口



ウィーンコーナー内の様子

## 府中市立図書館とウィーン市立図書館分館のヘルナルス区図書館の友好関係

府中市とヘルナルス区の友好協定締結から30周年に当たる2022年、ホルマイヤーガッセにあるウィーン市立図書館分館のヘルナルス区図書館も創立35周年を迎え、自身の小さな記念日を祝います。両市区図書館の交流は、1996年の施設間友好協定締結以来続いているので、府中市とヘルナルス区の関係とほぼ同じ年月を経ていることになります。

区の中心部に位置するヘルナルス区図書館は、全市民にとって教育、レジャー、娯楽の分野において、常にアクセスしやすい国際的な窓口としての役割を果たしています。その中でも分館の小さいながらも素晴らしいサービスとして、両公共施設が毎年行っているメディア交流があり、直接府中市立中央図書館からメディア媒体が提供されています。

2020年にヘルナルス区図書館は全面的に改装され、2021年2月のリニューアルオープン以来、新たな輝きを放っています。日本から送られてきた多くのメディア媒体が閲覧や貸し出しのために陳列されていた「府中の本棚」は、この大規模なプロジェクトの中で視覚的にも内容的にもアップグレードされ、府中市との友好的な交流を反映したものとなりました。現在のところ、日本語、英語、ドイツ語による日本の歴史、文化、社会生活など多岐にわたるテーマの蔵書があり、その中には洗練されたマンガコレクションなどのエンターテインメント・



メディアも含まれています。

これまでの府中とヘルナルスの交流におけるハイライトは、友好協定締結20周年の記念式典であったと言えます。ヘルナルス区図書館も2012年6月22日にそのプログラムに参加しました。本棚を揺るがすほどの見事な「武蔵国府太鼓」の演奏のほか、図書館内でオーストリア文学作品や日本の俳句の朗読

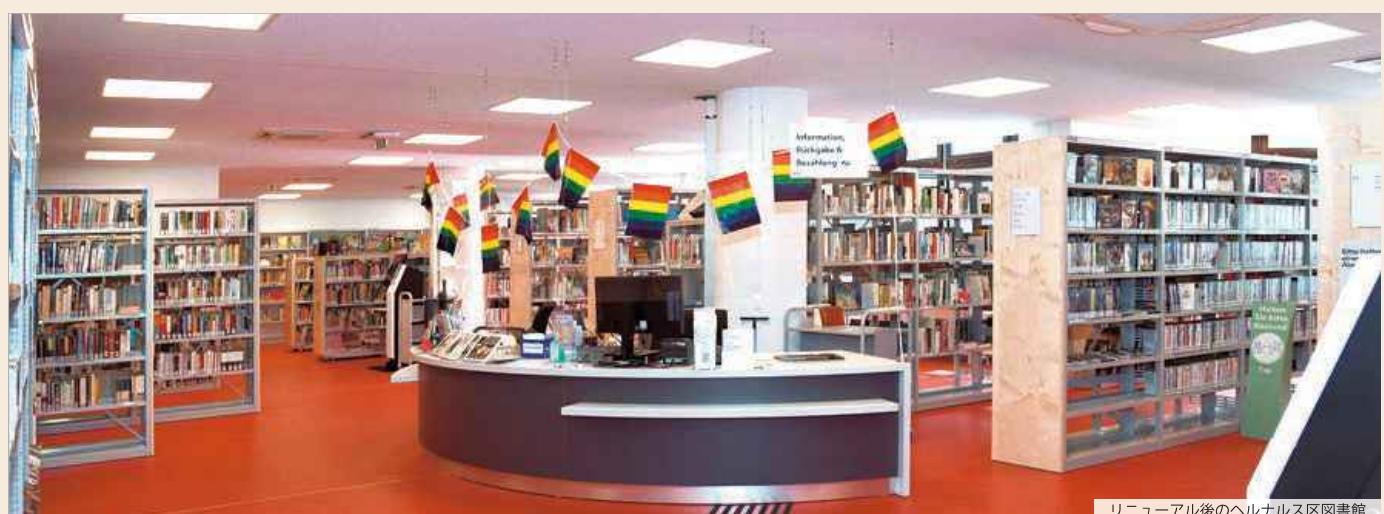
会が催され、クラシックバイオリンの生演奏が彩りを添えました。

その他、ヘルナルス区図書館では日本からのゲストを頻繁に迎えています。公式訪問の場合や純粋にプライベートなものもありますが、そのほとんどの方々が、この図書館と日本あるいは府中市とのつながりを十分に理解しています。

また、日本に関心のある現地の住民たちや学生たちも、この多様で潤沢なメディアの提供を大切に扱っています。

今後も、各機関間の全般的な連携、そして特に両図書館間での交流が一層盛んになることが期待されます。とりわけ府中市民とヘルナルス区民にはこのような形で、遙か遠くの相手国の文化を自宅にお持ち帰りできるという、質的にも量的にも類まれな機会を与えてくれているのであるからです。

ヘルナルス区図書館長 ニコラス・オスベルガー



リニューアル後のヘルナルス区図書館

## コラム

### 日本とオーストリアの中の 東京とウィーンの中の 府中・ヘルナルスの友好30年に寄せて

1992年8月19日、東京都府中市とヘルナルス区の友好協定が、当時の吉野和男市長とローベルト・ブレーガー区長によって締結されました。これを機に、活発な文化交流が始まり、文化・教育レベルで多くの奥深い出会いがありました。当ヘルナルス区博物館も文化施設として、この交流に何度も参加しています。府中の高校生は青少年ホームステイ派遣事業の一環で毎回ヘルナルス区博物館を訪れ、興味深く見学してくださっています。

「ホンジツハ ニホンノカタガタニモ オイティタダキマシテ、マコトニ アリガトウ ゴザイマス」

この拙い発音による“試み”で、わたしは日本からのお客様をお迎えしています。日本の方々は礼儀正しく、広い心で喜んでくださっているようにお見受けいたしますが、わたしの片言の日本語を本当にわかってくださっているかは不明です。

その後館内の案内が行われますが、こちらの方は通訳のイリーニさんが同行してくださるので、日本のお客様もすべてを理解できます。高校生たちは非常に意欲的で、たいていメモを取ったり、多くの質問をしたり、とりわけ熱心に写真を撮ったりされています。

毎年の若い方々の訪問だけではなく、その他の様々な出会いも印象深く心に残っています。

2006年3月20日、府中市とヘルナルス区の14年にわたる

友好関係を物語る交流展示会「出会い」がヘルナルス区博物館で開催されました。この展示会がどのようにして生まれたのか？と申しますと、相互訪問には素敵なお土産が付きものですから、これらの品々を一度展示してみようということになったのです。本物の着物まで陳列されました。この展示会は、日本大使館の後援で行い、開催期間中には日本大使の代理として、日本情報文化センター所長の戸田真介氏が来訪されました。

日本の代表団から贈られた神輿の模型も、当博物館にございます。

2017年には両市区の友好協定締結25周年を機に、友好協定が更新され、ヘルナルス区博物館では、友好協会のメンバーが企画した展示会が再び開催されました。美しい漆の作品、紙の作品、染物などのほか、それぞれの出会いの写真が紹介されました。

30年間の交流は多くのことを成し遂げ、個人の視野を広げ、外国文化への理解を深め、更には眞の友情をも育んできました。

当ヘルナルス区博物館にて皆様と再びお目にかかることを楽しみにしております。

ヘルナルス区博物館館長 トルウーデ・ノイホルト



府中市派遣生によるヘルナルス区博物館見学（2019年度）

2009年夏、府中市との青少年ホームステイ派遣事業で、派生の一人が我が家にホームステイしました。派遣事業の随行者の方々はウィーンの障害者の活動について興味を持っているということだったので、我が家で預かったアヤナさんも連れて、皆と一緒にペツツエル通りにあるウィーン生活支援協会「レベンスヒルフェ・ウィーン」が運営する知的障害者のための住居を訪れました。わたしは生活支援協会で「リトミック」の教師をしており、音楽、動作、声、その他の様々な素材を使って、能動的な開発プロセスをサポートしています。

入居者たちが日本からの客人たちのために住居や庭を案内してくださいました。そのあと広い音楽・運動室では、ゲストと入居者が一緒にわたしのリトミックレッスンを受けていた機会もありました。共に音楽を奏で、動作をしたり歌を歌ったりしている中で、互いに耳を傾け、遊びながら参加者たちの間の距離がだんだん縮まっていきました。言語によるコミュニケーションがそれほど重要ではない場合、文化の違いというものは比較的簡単に乗り越えることができます。

共同作業は親近感と信頼を生み出します。こうして、最初は遠慮していたゲストの皆さんもすぐに打ち解けてくださいました。入居者たちが自分たちの作った作品を見せたり、もちろんプレゼントの交換もしました。コーヒーとケーキの楽しいひと時をもって、訪問は終了となりました。

その後、わたしはヘルナルス区友好訪問団のメンバーとして、友好都市である府中市を訪れました。プログラムには老人ホームの視察もありました。わたしたちは、高齢者た



生活支援協会への訪問②(2009年8月)

ちが介護者たちと音楽によるレクリエーションに参加している場を見学させていただきました。お年寄りたちは、アニメーションの動きに合わせて、太鼓や拍子木、ガラガラやその類の打楽器を鳴らしていました。介護者たちも必要に応じてサポートし、一緒に歌っていました。お年寄りたちは積極的に参加していて楽しそうでした。

わたしは自分の仕事のことを身に染みて感じました。音楽の楽しさで人を活性化するという基本的な考え方は同じです。ただ、手段は少々違っていました。わたしたちのところでは、アニメーション動画の使用は一般的ではありません。日本では、電子媒體を使うことへの抵抗感が少ないようです。

高齢者たちは、このコンピューターによるレクリエーションの形を気に入っているようでした。笑ったり手を叩いたりして、皆さんが楽しんでいました。

また、この訪問の終わりにも、お茶と日本の餅菓子のおやつと一緒にいただきました。

高齢者や身体あるいは認知障害のある人々の介護においては、異なる文化圏であっても似たような方法にたどり着くことは明らかです。それは、これらが普遍的な人間のニーズに基づいているからでしょう。



生活支援協会への訪問①(2009年8月)

特別支援教育士 カローラ・リュマルツ

## ヘルナルス区・府中市友好協定締結30周年に寄せて

初めてウィーン市ヘルナルス区を訪れたのは、2010(平成22)年5月26日より5月31日まででした。大國魂神社のくらやみ祭が都無形民俗文化財に指定され、翌年は、御鎮座1900年を迎えるにあたり、ウィーンより大勢の皆様にお見えいただきたいと、市民友好訪問団に特別に参加させていただきました。

府中市がヘルナルス区と友好協定を締結して以来、交流事業で神社職員がお囃子のお披露目に招待されたり、ヘルナルス区の皆様が府中にお見えの際には神社にご案内いただいたりと交流はありましたが、当時府中国際友好交流会事務局長で元府中市助役の杉田道雄様より「宮司も一度ヘルナルスにいらっしゃいよ」とのお誘いを受けての訪問でした。

訪問するからには物見遊山では勿体ないので、日本の伝統文化を披露したいと、当時の中島信一副市長と打合せをいたし、巫女さんが「浦安の舞」を舞う事となりました。しかし、浦安の舞の一座では寂しいので他に何か舞があるかと打合せ、宮司が舞う「朝日舞」を私が舞う事となりました。舞を披露する場所は、府中市より和太鼓が寄進されたヘルナルス区役所前の広場で行う予定でしたが、折角だからカルヴァリエンベルク教会ではどうだろと話が進み、ヘルナルス区の担当の方とのやり取りで、何とか教会に舞の奉納が出来ることとなり、神職と巫女2名にて参加いたしました。

舞を奉納するにも、神道では祓の儀式が重要ですが、教会は聖なる場所で穢れは無いのでその神道儀式は必要ないとの教会側の主張に、神社では神聖な拝殿でも修祓儀は大切なセレモニーだと説明いたして許可をいただきました。巫女が舞う「浦安の舞」は、十二单衣を纏って舞いますので、平安時代の雅な貴族の衣装を伝えるものです。私が舞いました「朝日舞」も衣冠束帯姿で舞いますので、初めて見るヘルナルス区の皆さんには大好評で、舞い終わると拍手の嵐でした。また、教会内ではスタンディングオベーションが起り、舞い終えて控室で冠を脱ぎホットしている所に、市役所の岩田さんが来て「早く来て下さい、拍手に答禮ですよ!」と慌てて冠をかぶり、巫女と挨拶に向かいました。舞の奉納の前に、讶しげに見ていた教会の方も「ワンダフル、サンキュー、サンキュー」と握手を求められたのには驚きました。厳粛で敬虔な神への祈りは、宗派を超えるものだと実感いたしました。

ヘルナルスでは、区役所を始めいくつかの施設を表敬訪問いたしましたが、ヘルナルス・府中友好協会会長プレーガーさんリュウテキ ひちりき しょうが副会長を務める新設の老人ホームを訪れ、龍笛、簞築、笙の三種類の楽器だけでしたが雅楽「越天楽」を演奏いたし、入居の皆様に日本の伝統音楽を楽しんでいただきました。

しかし、翌年は3月に東日本大震災が起り、原発事故の影響で大祭も神輿渡御が行われず、ヘルナルス区よりの訪問団も中止となり残念でしたが、2012(平成24)年6月に友好協定締結20周年記念府中市民友好訪問団にて高野市長ご夫妻と共に再度ウィーンを訪れることが出来ました。友好協定締結20周年の記念式典では、ヘルナルス区の皆様と旧交を温め、美術史博物館や楽友協会のモーツアルト・コンサートを楽しんだり、ウィンナーワルツを習ったりした事が昨日の事のようです

本年、友好協定締結30周年を迎え、ヘルナルス・府中友好協会会長のローベルト・プレーガー様は、2021(令和3)年春の叙勲にて旭日双光章を受章されました。中島元副市長と杉田元助役に野口忠直前市長も泉下でお祝いされている事と思います。コロナ禍が早く終息いたし、友好協定締結30周年とプレーガー様のお祝いの為に、ヘルナルスを再訪出来ることを心より願っております。

大國魂神社宮司 猿渡 昌盛



ヘルナルス区友好訪問団による大國魂神社見学(2019年10月)



大國魂神社

## カルヴァリエンベルク教会より心からのグリュース・ゴット！

府中市(日本)とヘルナルス区(オーストリア)間の特筆すべきパートナーシップは、もう30年も続いています。この年月の中で、両者が互いに尊重し合いながら育み、興味深くかつ強固な結びつきへと発展してきました。

9,000キロメートルあまりの距離を越えて、あらゆる方法でコンスタントな交流が行われています。双方の友好訪問も何度も回を重ねています。ウィーン側すべての活動の原動力となっているのは、ローベルト・プレーガー氏です。この場をお借りして、氏の尽力に感謝したいと存じます。

わたし個人的にも、日本のパートナーの方々との数々の出会いが思い起こされます。府中からのお客様方をカルヴァリエンベルクの丘へお連れし、当教区教会をご案内させていただきました。その中でも、2010年の区祝祭週間で当教会において披露された「平和の舞」が特に印象に残っています。その際、東京都府中市の総社である大國魂神社の宮司、猿渡昌盛氏をお迎えいたしました。神社の巫女たちと一緒に、平和の舞である「浦安の舞」を披露してくださったのですが、このゲストからの舞踊と音楽の贈り物にわたしは深く感動いたしました。

5月28日のこの晩、わたしは音楽とダンスがいかに異なる文化の人々を結びつけることができるか、ということを身をもって経験いたしました。

府中市とヘルナルス区のようなパートナーシップによる社会的・文化的交流は、国家間の理解に貢献し、地球上の人々の平和共存のための小さな架け橋であることは明らかです。司祭として申しあげますと、わたしたちカトリック教会にとつても、このような交流から受けるものは恩恵でしかないと信じております。

そのような意味でも、わたしはこのパートナーシップに感謝し、今後も末永い存続を願っております。このパートナーシップを生かしているすべての責任者の方々と「善意の人々」が、最善を尽くし、彼らに最高の実りをもたらしてくれますように。

この確信のもと、より良き将来に神の祝福があらんことをお祈りしています。

カルヴァリエンベルク教会首席司祭  
カール・エンゲルマン



## 童謡と手づくりで感動を共に

2000(平成12)年の初めの頃、ヘルナルス区の高校生の来訪時に、モーツアルトやシューベルトの曲で歓迎させていただいたのが交流の始まりでした。童謡はもちろんのこと、折り紙を始め、和紙をつかった手づくりの作品や、書道・風呂敷包み等々、音楽と共にお伝えさせていただき、ヘルナルス区の皆様も、木の実アートや手染め、蝶細工等々の心こもった手づくりで、もてなしてくださいました。

童謡は、100年の歴史を誇る日本独特の文化。1800年代後半、子どもの啓蒙教育のために、外国の曲の一部を拝借し作られたのが始まりです。ウィーンの皆様が「おや?」と思われる曲もあります。その後、日本独自の歌が作られるようになり、現在では、世界的にも珍しい童謡というジャンルが確立されました。その中でも、日本を代表する曲が「故郷」です。

私たちが歌う時、真剣に口の動きを見てくれています。「故郷」は、ヘルナルス区の皆様と心が一つになれる大切な曲となりました。また、私たちの街の村野四郎作詞の「ぶんぶんぶん」は、ウィーンに隣接するボヘミアの民謡。子ども達がミツバチ

の紙細工を掲げながら、元気に歓迎してくださった等、懐かしい思い出となっています。

私たち府中童謡の会のテーマは、子ども達と高齢者。ハリルシュガッセ小学校と高齢者施設は、定番の訪問となっています。その中でも、お子様達の目覚ましい成長に、励まされることが沢山あります。また、高齢者の施設では、国の違いを感じることもなく、有意義な楽しい時間を過ごさせていただいている。まさしく、音楽は世界共通語です。

2019(令和元)年9月、日墺修好150年周年事業において、童謡に加え、当会に協力くださっている、宮内庁の元楽長・雅楽の岩波滋先生や琉球宮廷の祝いの舞や空手の講師と共に、記念行事に華を添えさせていただきましたことは、参加者一同、人生の宝となりました。

音楽は、世界の人々と戦わずして繋がることができる文化です。これからも末永く、ヘルナルス区と府中市の交流が深まる事を念じながら、童謡の普及に努めてまいります。

府中童謡の会代表 藤原 美江



ハリルシュガッセ小学校の子どもたちが歌で歓迎(2009年5月)



ハリルシュガッセ小学校での歌の交流(2006年5月)

### 音楽は世界共通語、翻訳も要らない、心から心に語りかけるもの

1992年、府中市でのサマーフェスティヴァルの一環として、府中市・ヘルナルス区友好協定締結に相応しいプログラムを準備するにあたり、「異文化を理解するために、音楽ほど助けになるものは他にない」と、区長のローベルト・プレガー氏は考えました。そこで、ヘルナルス音楽学校に、この旅行のためにシュランメル四重奏を準備してほしい、と申し出がありました。

オーストリアでは、祝祭典の習慣として、必ず少なくとも3曲の音楽が演奏されます。①式典の前に魂を高揚させるために、②式典の途中で物事に思いを馳せるために、③最後に式典の締めくくりとして。

驚いたことに、府中市から、シュランメル音楽を含む、少なくとも40分にわたるコンサートをとの要望がありました。想像以上の演奏依頼は私たちにとって挑戦となりました。「演奏の出来る人は、皆、参加しよう!」とのシュランメル兄弟のモットーにもあるとおり、驚くほど迅速に、音楽の冒険のために、音楽生徒によるカルテットを立ち上げることが出来ました。ラート家の楽譜宝庫から、相応しい曲が掘り出され、特別な新しいメンバーのために編曲されました。「ヘルナルス・シュランメル四重奏団」(ヴァイオリン2丁、ギター1本、チェロ1丁)の誕生です!若い音楽家達は、日本への招待を受けたこと、演奏の機会を得たことをとても喜びました。本番に向け、各自がしっかりと練習し、また集まって稽古を重ね、ホイリゲで、また祝祭週間でも、その演奏を披露しました。

府中市の若い音楽家たちとの共演のために、楽譜も交換されました。弦楽四重奏、ギターそして縦笛を加えた編曲の練習も行われ、府中の森芸術劇場にあるウィーンホールでの演奏には、更に歌とオルガンが加わりました。

忘れられないのは、府中市のウィーンホールでの大コンサートの際、観客の皆さんに、一緒に歌ってくださるようお誘いしたこと、そして、競馬場の野外でのフェスティヴァルでも共に演奏したことです!私達は直接言葉を交わすことは出来なかつたけれど、共に音楽を奏で、一緒に歌うことが出来ました。そしてそれを可能にするために、日本とオーストリアの歌曲を盛り込んだ楽譜が特別に作られました。その中には日本の代表的な曲「ふるさと」と「さくら」、これらに続いて「菩提樹」「別れの歌」が盛り込まれました。感動的だったのは、私達はお互いに、

目の表情や身振りだけで、お互いの嬉しい気持ちや、相手への尊敬を伝える事ができたことです。

府中市とヘルナルス区の友好関係において、音楽がその基礎の一部であることを常に意識してきました。「言葉が終わるところから音楽が始まる」(E.T.A.ホフマン)

過去30年の中での度重なる会合、催し物などの交流の場において、音楽は大きな役割を果たしてきました。「ヘルナルス・シュランメル団」は府中市からの訪問団が来られる度に、ヴィルヘルミーネン城、メトロポール劇場、区役所、そしてウィーン市庁舎で演奏をしてきました。ハリルシュガッセ小学校では、日本からのお客様がいらした際には、子ども達が色んな国の歌を歌い、歓迎の意を表わしています。また、ヘルナルスのダンス学校では、特別にダンス講座を、日本から見えたお客様のために開講しています。「府中囃子」と武蔵国府太鼓連盟の皆さん、府中童謡の会の皆さん、宮司さんと巫女のお二人によって披露されたお神楽、府中・ウィーン交流合唱団の皆さん、などなど、私達に大きな感動を与えてくださいました!

最後にお伝えしたいことがあります。1993年に、当時の府中市長であった故・吉野和男氏がウィーンを訪問された際のこと。警察音楽隊を指揮されたのですが、その上手く行ったことと言ったら!

元音楽教師 クリストイネ・ラート



ヘルナルス・シュランメル四重奏団(1992年)

## スポーツ交流

府中市では、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催決定後、大会に向け、各国競技選手団の事前キャンプ誘致を進めてきました。

2013(平成25)年に東京都で第68回国民体育大会が開催された際、本市では卓球競技の全種別を実施した実績があり、またオーストリアの卓球代表はオリンピックへの出場実績があつたことから、府中市卓球連盟及びヘルナルス区との協働のもと、卓球オーストリア代表チームの事前キャンプの誘致を進めました。その結果、2019(令和元)年5月20日にオーストリア卓球連盟及びオーストリアオリンピック委員会と、東京2020オリンピック等に係る覚書を締結することができました。

覚書締結後、複数回にわたりキャンプの実施が計画されました。選手のスケジュールの都合で実現できず、オリンピックの1年延期を経て、大会直前の2021(令和3)年7月に事前キャンプを実現することができました。

受入れにあたっては、新型コロナウイルス感染症対策としていわゆる「バブル方式」の環境を作り、選手・スタッフと一般の方との接触を禁じたキャンプ運営を行う必要があり、予定していた交流等を大きく見直すことが求められましたが、感染者を出すことなく、キャンプを終えることができました。

また、東京2020オリンピックでは市内唯一の開催競技である自転車競技(ロードレース)が開催されました。市内に所在する武蔵野の森公園がスタート地点となり、本市のシンボルである国指定天然記念物の馬場大門のケヤキ並木と大國魂神社の参道を世界のアスリートが駆け抜けました。なお、女子ロードレースでは、オーストリア代表のアナ・キーゼンホファー選手が優勝しました。

府中市都市交流担当



◀市HP  
「卓球オーストリア代表チーム事前キャンプ」



▲市HP

「チームからのメッセージ」



▲市HP

「チームへのインタビュー」



東京2020オリンピック等に向けた卓球オーストリア代表の事前キャンプに係る覚書締結式(2019年5月20日)



歓迎セレモニー(2021年7月)



事前キャンプでの練習風景(2021年7月)

## スポーツ分野での出会い

### 1993年8月

府中市で国際サッカー親善試合が行われ、ヘルナルス区からポストSVのユースサッカーチームが参加

### 1997年5月

府中市民グループのウィーン訪問に際して、ヘルナルス区でテニス大会を開催

### 2000年6月

オーストリアの青少年バドミントンチームが府中市を訪れ、交流大会に参加



オーストリアバドミントンチームとの交流大会(2000年6月)

### 2021年7月

東京2020オリンピックに向けて、卓球オーストリア代表チームがオーストリアのホストタウンである府中市で事前キャンプを実施



府中市民から卓球オーストリア代表に向けた応援寄せ書きフラッグ(2021年7月)

オーストリア卓球連盟のスポーツディレクターであるカール・ユンドラック氏は、府中市の関係者に心からの感謝の意を表明しました。以下はその抜粋です。

府中では、とても快適な、そしてプロフェッショナルな時間を過ごすことができました。

最後にオーストリア卓球連盟と選手全員、そしてスタッフを代表して、府中市側の100名を超えるキャンプに携わったメンバーの方々の素晴らしいおもてなしと、温かいお気遣いに心から感謝の気持ちを述べさせていただきます。

チーム全員が到着した直後から気持ちよく過ごすことができ、また我々の数々の追加希望もすべて叶えて下さいました。選手の中からは、「今まで経験した中で、最高のトレーニングキャンプだった」と言う声も聞かれました。

府中市の皆さん、色々とお世話になり、本当に有難うございました！

ヘルナルス区現地連絡員

ドーリ・イリーニ

ヘルナルス・府中友好協会副会長

ブリギッテ・ツェヒリンガー



卓球オーストリア代表チームの夏祭り体験(2021年7月)

# コラム

## 自治体レベルの交流

友好協定締結においては、通常、芸術と文化の分野でのプロジェクトが主な柱となります。互いの市民が出会ったり、接触を持ったりすることが重要な役割を果たします。

すでに30年間継続してきた府中市とヘルナルス区の関係からは、9,142kmの距離を隔てながらも、多くのものが生まれ、目に見える形へと進展しました。

過去30年間に両市区の間で実施されてきた複数回にわたる市民訪問では、毎回双方から多数の政治関係者も参加しており、プログラムには常に学校、幼稚園、成人教育センター、老人ホーム、医療機関、図書館、ゴミ処理場、水道、森林管理、公共交通機関、社会福祉相談機関、自治体の施設への訪問が含まれていました。

遠方から訪れる者にとっては、パートナーの自治体がその地域で問題をどのように解決しているかを見ることが非常に重要でした。日本の模範的な清潔さは、オーストリアからの訪問団にとって、清潔な街、清潔な区を保つ努力を続けなければならないという重要な動機となりました。日本からのお客様にとって、ウィーンのゴミ処理施設の視察が特に興味深かったようです。その後の府中市への

訪問の際、われわれは府中市全域でゴミの分別システムが導入されている様子を見ることができました。自治体の政策に関する様々な課題に対して、他の自治体、都市、国から解決策を学べることは、非常に価値のあることです。

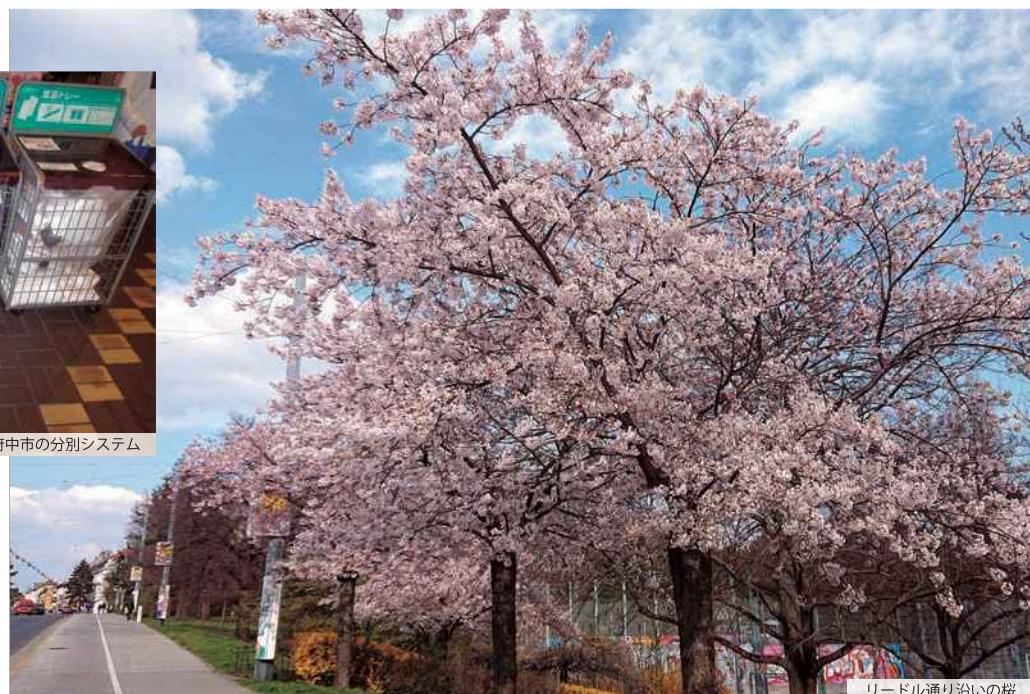
また、幾度か相互の植樹も行われました。例えば、1992年の友好協定締結の際には、府中の生涯学習センター横に菩提樹が植えられ、現在ではすでに立派な大きさに成長しています。その10年後には、府中の森芸術劇場前にカエデが植樹されました。一方、府中市からは桜の木が贈られ、それ以来、春になるとリードル通り沿いを美しく彩ってくれています。1993年からは、エルタライン広場に友好の証である銀杏の木が育っています。

最後に、2021年6月、ヘルナルス区議会は、30周年記念年の始まりにあたり、これまで正式名称がなかったヘルベック通りにある美しい公園エリアを「FUCHU PARK」と命名することを決定しました。この公園が、年を経るごとにますます日本の顔となっていくことを願っています。

元ヘルナルス副区長 ペーター・エリク・サス



府中市の分別システム



リードル通り沿いの桜

ヘルナルス区と府中市の友好関係の枠組みの中で、様々な構成グループが府中市及び日本を訪れました。ヘルナルス・府中友好協会会長であるローベルト・ブレーガー氏を団長とした訪問は毎回、その参加者にとって特別な体験となりました。

府中市は、ウィーンからお客様に様々なプログラムを提供するために、費用と努力を惜しません。その主な目的は、両市区がお互いに知り合うこと、そして、両市区民の交流です。

府中市役所を訪れた際には、必ず市長の温かい歓迎が訪問団を待ち受けています。

府中市の担当職員、そして府中国際友好交流会のメンバーの皆さん、府中市の観光名所を紹介してくださいます。魂の要ともいえる大國魂神社、郷土の森博物館、市立図書館、学校、保育所、高齢者施設、生涯学習センター、スポーツ施設など、様々な施設の訪問は、日程の重要なポイントです。言葉の壁を乗り越えるため、通訳及びコーディネーターとしてイリーニ氏が、ほとんどの旅行に同行しました。

日程とは別に、特別な催し物や祝祭行事が常に用意されており、訪問参加者の胸に大きな印象を与えました。

#### 1996年・1999年

くらやみ祭開催時に訪問。

#### 2000年

オーストリアの青少年バドミントンチームと府中市の高校生が対戦。

#### 2004年

府中市訪問に参加したヘルナルス区長ブフェッファー博士が「オーストリアの暮らしと女性」というテーマで講演会を実施。

#### 2014年

府中市制施行60周年を記念して行われた山車の巡行、府中の森芸術劇場での祝祭イベントはとても印象的でした。アレクサンダー・サス氏と彼のパートナーであるシルヴィア・ルバイ氏は、府中市民のためにウィンナーワルツ体験会を開き、熱心な観客に皇帝円舞曲を披露。

**2017年**

ヘルナルス区訪問団は桜まつり及び友好協定締結25周年記念式典に参加。

**2019年**

ヘルナルス区訪問団が府中市民を対象に料理講習会を開催。府中市側からのリクエストで、ウィンナーシュニッツェルとポテトサラダ、杏のジャムのパラチンケンを作成。若手音楽家「Klangvierterl(クラングフィアテル)」によるコンサートを開催し、ヘルナルス区発祥のシュランメル音楽やウィーンの伝統的な音楽を披露。

府中市への訪問時には、そのプログラムの一貫として、日本の首都である東京への訪問はもちろんのこと、観光を目的として、東京以外の都市への2日間の旅も組み込まれています。

ヘルナルス・府中友好協会副会長  
ブリギッテ・ツェヒリンガー



レセプションにてウィンナーワルツを披露（2014年10月）

# コラム

## 姉妹都市 佐久穂町

府中市は長野県佐久穂町と姉妹都市として交流を行っています。

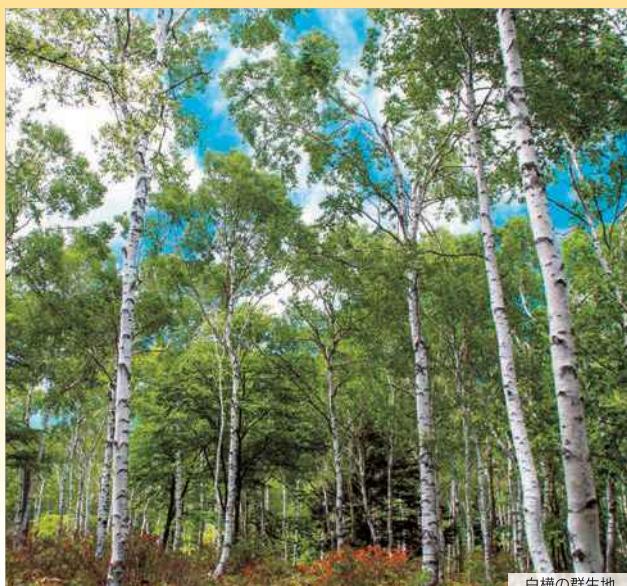
佐久穂町は府中市から車で約2時間半、長野県の東部に位置します。町内を南北に流れる千曲川、白樺の群生地や苔の森が広がる八千穂高原など、豊かな自然が広がっています。また、冬にはスキー場がオープンし、東京からもスキー客が訪れにぎわいます。

また、日中の寒暖差を生かした農業が盛んで、どうもろこしやりんご、ブルーン、米など多種多様な農産物が生産されます。佐久穂町産の野菜や果物は府中市の祭りなどでも販売され、市民にも親しまれています。

2019(令和元)年にヘルナルス区訪問団が来訪された際には、佐久穂町も訪れました。保育園児の合唱による歓迎、佐々木勝町長との対談など、ヘルナルス区と佐久穂町との交流の機会となりました。

訪問団には、ヘルナルス区の国内友好都市であるマリア・ラッハからの参加者が含まれていましたが、標高が高く自然豊かな佐久穂町の風景はマリア・ラッハに似た雰囲気を感じる、との感想を述べていました。

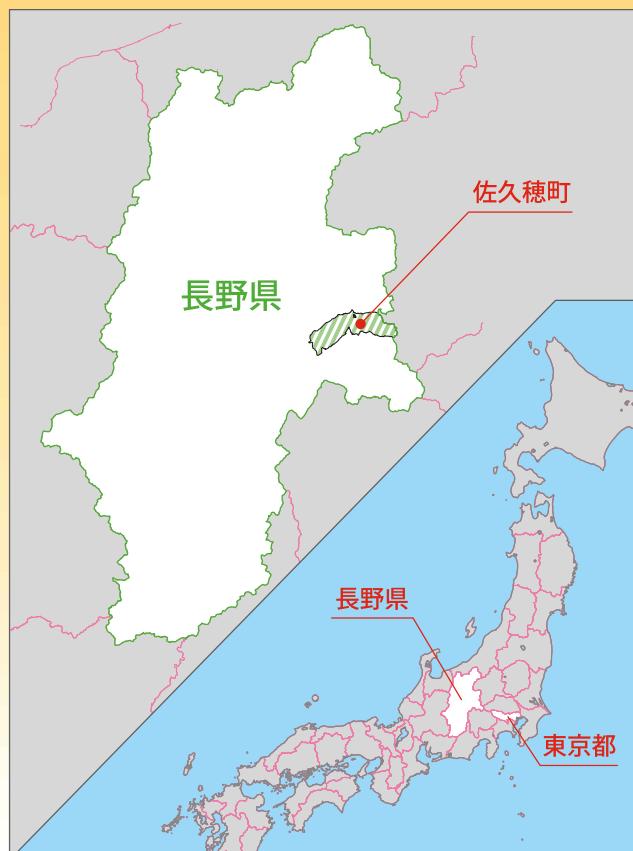
府中市都市交流担当



ヘルナルス区友好訪問団が佐久穂町役場を訪問(2019年10月)



白駒の池にて(2019年10月)





これ以上ないほどの大きな違いがある府中市と佐久穂町が姉妹都市であるのと同じように、ヘルナルス区とマリア・ラッハも友好関係を結んでいます。

一方では、世界的に有名な大都市である東京とウィーン、他方では、地理上ではそれぞれの大都市まで明らかに遠距離に位置している二つの田園風の地方の町。

都会に住む人たちが、田舎の牧歌的風景を求めて、また田園風景の中で暮らす人たちが都会を求めてコンタクトを取ろうとするのは、国や文化が違っても見られる現象なのでしょう。このことは、二つの素晴らしい友好関係を見ても明らかです。

このオーストリア国内での友好関係が大陸を越えて、日本とオーストリアという国際的な結びつきに発展することにより、私達はこれを大きな恵みと感じています。

ヘルナルス区との友好関係を通じて、我が町の住人数名が、日本を訪ねるという機会を得ることが出来ました。その際、府中市と佐久穂町への訪問は特別なものでした。

日本への旅を通して、私達は多くの新しいこと、文化、自然、そして人の違いを目の当たりにしました。同時に、友好関係がもたらすものを体験することも出来たのです。様々な「相違」が存在する中にありながら、私達はいつも歓迎されているという気持ちを抱いていました。初対面の瞬間から、お互いがお互いに対して持つ興味に満たされていたのです。

この日本への旅は、特別なもの一真的出会いでありました!

マリア・ラッハ村長 エドムンド・ビンダー  
副村長 ロベルト・ホフマン  
元村長 ヨゼフ・ゾンマー